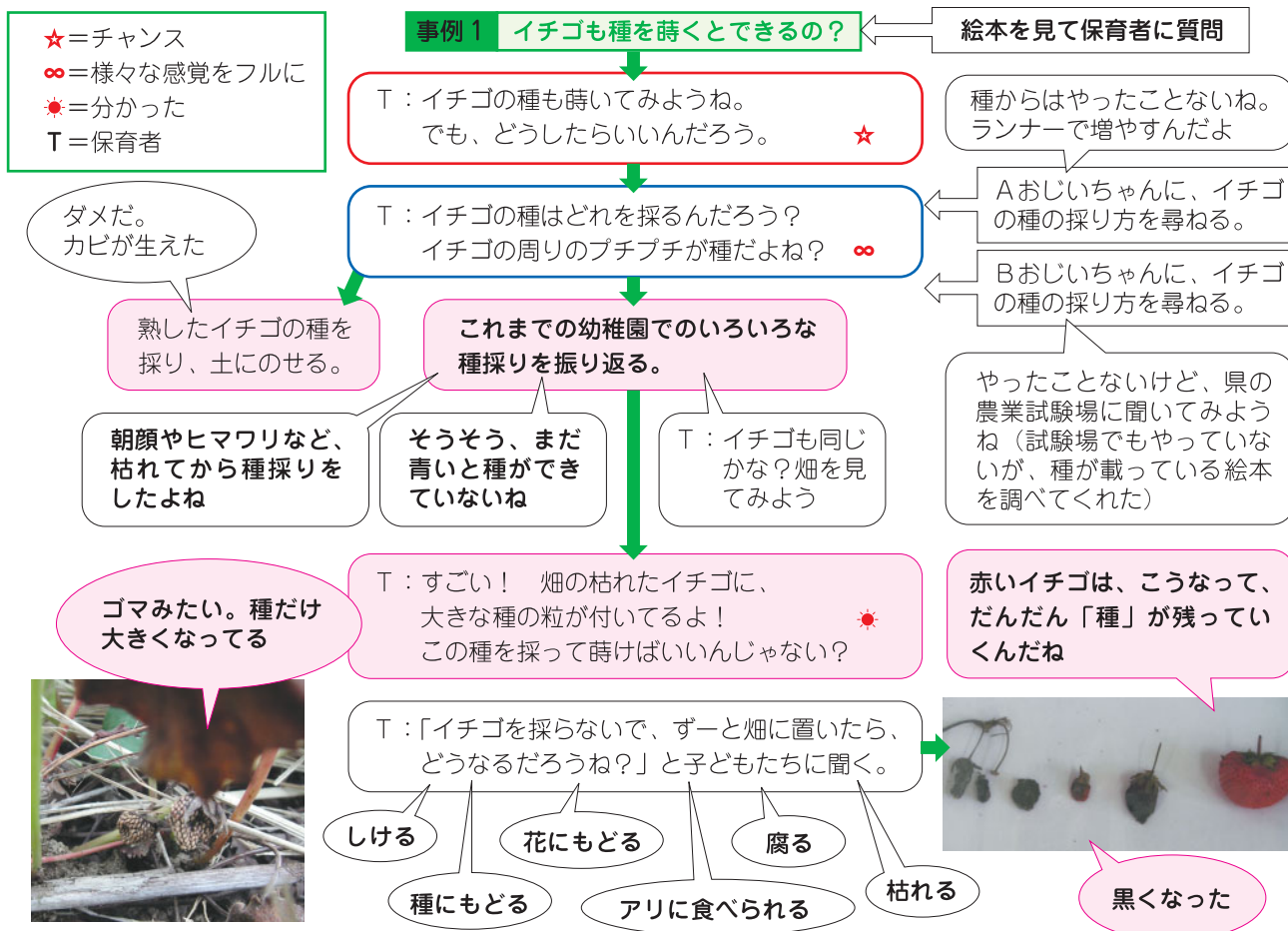


イチゴも種を蒔くとできるの？

いわき市立藤原幼稚園（福島県いわき市）

[4歳児]

子どもからの「先生、イチゴも種を蒔くとできるの？」との質問に、「蒔いてみようね」と約束するが、これまでやったことがない保育者は方法がわからない。いろいろ聞いたり、調べたりしてみる。



「イチゴの実」から「イチゴの種」へ（イチゴに対する見方の変化）

この後、子どもたちは食べられる赤いイチゴだけでなく「先生、イチゴの種があったよ！」と枯れたイチゴも喜んで手のひらに乗せて持ってきた。実から種へ、イチゴの価値観の大きな変化が見られた。また、保育者自身、経験と知識がないところでの取り組みだったので、「蒔くためのイチゴの種」の発見には子どもたちと共に大感激であった。

イチゴは種の栄養だったんだね！

実際にイチゴの「花托部（食べる部分）」が黒く小さくなり、「果実部（表面の種）」が硬く大きくなっていく様子を見て、「イチゴが栄養になっている」と『種の役割・意義』を実感する。

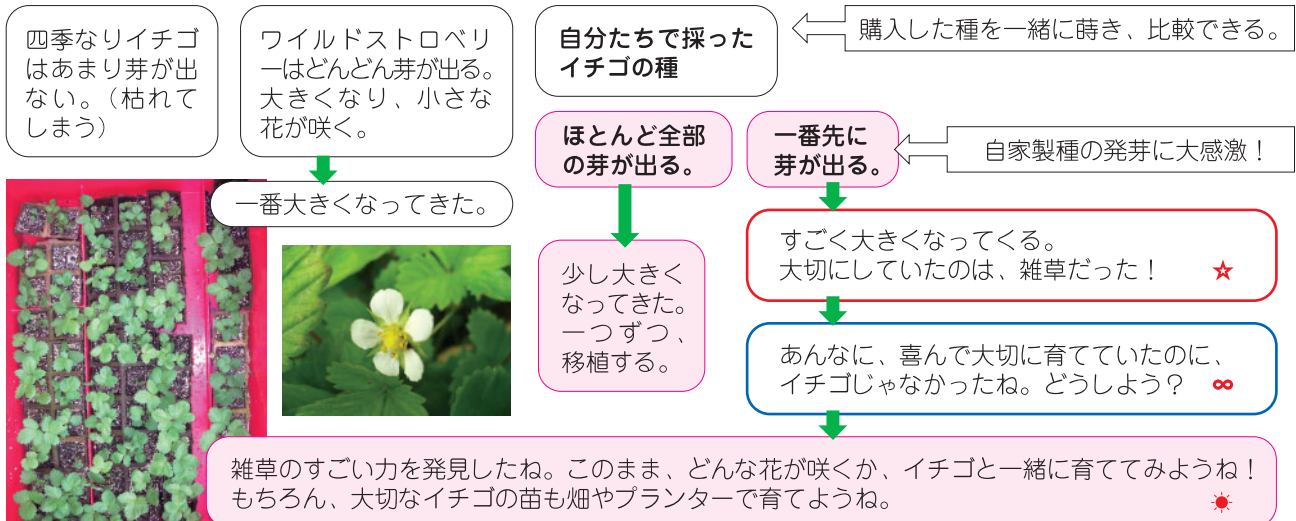
事例2 芽が出てきたよ

園の種に加え、購入した四季なりイチゴ、ワイルドストロベリーの種の3種類の種蒔きをして育てる。最初に園のイチゴの種が芽を出し「可愛いね」「頑張れ」など喜んだり水をたくさんあげたりする。ワイルドストロベリーはグングン大きくなり、最初に花が咲く。園のイチゴのランナーから、苗も育てる。「大きくなった」「イチゴの葉っぱと同じだ」などと喜んで毎日見ている。



ところが、幼稚園のイチゴの種から出たはずの芽は…「何か変だぞ」…「あれれ」…「違った」「イチゴじゃなかった！こんなに小さかった」「葉っぱにトゲトゲもある」「あれ～？なんかちょっと変だね」…「イチゴじゃないよ」と気付く。

事例3 すごく大きくなってくる



イチゴの種から、イチゴの葉へ（葉の形から気付いた植物の違い）

ほとんどの種から発芽し、立派に育つ。しかも自分たちで畑から採り、一粒ずつまんだイチゴの種から一番先に小さな芽が出てきた時は、幼児も保育者も感激する。しかし、他の種から発芽した葉は、イチゴの葉っぱと同じ形をしているが、最初の芽は育つにつれ、葉の形がおかしい。こうして、子どもたちは雑草と比較することにより、葉の形に着目し、「（種から出た本葉は）イチゴの葉っぱと同じだ」と気付くことができた。また、保育者は雑草というハブニングのおかげで、「比較して観察」することの大切さを学んだ。

事例4 いろんな「種」を蒔いたよ

二十日大根：サラダパーティーをして食べる。野菜嫌いな子も食べ、家庭でも栽培する。

ヒマワリ：殻をかぶって、芽が出てくる。殻も大切にとっている姿がある。
生長の速さや勢いに、新鮮な体験をする。

スイカ：スイカを食べて出てきた種を「せっかくの種だからね」と言い、蒔く。
どんどん伸びて花が咲く。小さな実を付ける。



イチゴの種から、いろいろな種へ（他の種への広がり）

自分たちで種を蒔いて世話をすることで、愛情に裏付けられた「優しい目での観察」「美味しい体験」が続けられている。イチゴの種からスタートした実践が様々な種へと広がり、種が大切なものであるということが、子どもたちに浸透してきた。保育者も場を提供することで様々な「種の不思議」を子どもたちと共に感じる事ができた。

まとめ 「科学の前では幼児も保育者も対等であった」～同じ方向を見つめて

私たち保育者はこれまで、例えば「行動観察」や「言葉の記録」など、保育者が幼児を見つめて「幼児理解」に努め、幼児の発達を側面から支援することが多かった。ところが、本実践では「一粒の種」を同じ目線で見つめる幼児と保育者がおり、「科学」の前では対等であった。「小さな種の偉大な自然」「小さな種の中の小宇宙」を肌で感じ、その変化にじっと目を凝らしてきた。それだけ、発見の喜びや感動は、幼児も保育者も共に非常に大きかった。本当の共感であった。

ポイント

子どもと生活や遊びをつくり出して保育をする中では、この実践のように保育者の知らない未経験のことに向かい、子どもと一緒に活動することがあります。保育者も未知の目的に向かうために、“試行錯誤する中で生まれる疑問や課題”“乗り越えるための気付きや行動”“最後までやり遂げる思いや考え”などに共感しながら進めることができ、まさに子どもが主体の展開をすることができます。子どもたちは自然や人などの環境に友達と一緒に進んでかかわることで、4歳児らしい協同的な学びを繰り広げ、保育者は子どもと真剣に向き合い、子どもと共に「科学する心」が育まれた喜びや感動を実感しています。